日１３－４０

「千年の愉楽」　　✡✡✡✡✡

２０１３（平成２５）年3月１６日鑑賞<テアトル梅田>

監督：若松孝二
原作：中上健次『千年の愉楽』（河出書房新社刊）
オリュウノオバ（紀州の路地で産婆を営む）／寺島しのぶ
礼如（オリュウの夫、僧侶）／佐野史郎
中本半蔵／高良健吾
田口三好／高岡蒼佑
中本達男／染谷将太
安田／山本太郎
ミツ／原田麻由
中本彦之助（女に腹を刺されて死ぬ男、半蔵の父）／井浦新
ユキノ（半蔵の妻）／石橋杏奈
トミ（彦之助の子・半蔵を産む女）／増田恵美
カネ（馬喰の久市の留守中に半蔵と浮気する女）／並木愛枝
清二／地曳豪
初枝（半蔵を誘惑する後家）／安部智凛
／瀧口亮二
辰吉（半蔵と山の下草刈りをする同僚）／岡部尚
／山岡一
桑原（盗賊の元締め）／水上竜士
直一郎（桑原の仲間の盗賊）／岩間天嗣
／大谷友右衛門
蘭子（三好の相手をする娼婦）／片山瞳
芳子（三好が誘惑する女）／月船さらら
／渋川清彦
／大西信満
／石田淡朗
／小林ユウキチ
／大和田健介
／真樹めぐみ
／大西礼芳
２０１１年・日本映画・１１８分
配給／若松プロダクション、スコーレ

<若松監督がなぜ中上文学に挑戦？>

『実録・連合赤軍　あさま山荘への道程（みち）』（０７年）と『１１・２５自決の日 三島由紀夫と若者たち』（１１年）はいかにも若松孝二監督らしい、いや今ドキは同監督以外誰にも取り組むことのできない作品だった（『シネマルーム１８』５６頁、『シネマルーム２９』９３頁参照）。その若松監督が最新作として取り組んだのが、中上健次の１９８２年の短編『千年の愉楽』の映画化だ。「中上文学」はかなり特殊。私の大学時代に夜遅くまでよく闘わせていた「文学談議」ではそんな声が強かった。現に「被差別部落」特有の「血族」や「路地」などの言葉・概念を見るだけでもそんな特殊性がわかるため、学生運動という現実の中に熱中していた私は中上文学にハマることは全くなかった。しかし、映画の世界では『軽蔑』が２０１１年に高良健吾の主演で映画化されたため、今ドキかなり特殊な（？）「中上文学最後の純愛モノ」を味わうことができた（『シネマルーム２７』１７０頁参照）。

その出生も家族関係も複雑で「兄の首つり」事件まで体験している中上文学のキーワードは、「血族」と「路地」。この「血族」と「路地」の中の共同体を中心にした「紀州サーガ」と呼ばれる独特の土着的な作品世界をつくり上げたと言われている。本作のパンフレット冒頭にある若松監督の「生きることは不条理だから美しい」によれば、２人は「新宿の飲み屋で大げんかをして以来の友人だった」そうだが、そんな若松監督がなぜ今、中上文学に？しかも、『千年の愉楽』に？

<この「テーマ」はちょっと早すぎたのでは・・・？>

私は『シネマルーム２９』に、２０１２年１０月２４日付で「若松孝二監督を悼む」という１頁のコラムを書いた（１７０頁参照）。若松監督は本作の公開準備中であった２０１２年１０月１７日に不慮の事故で亡くなったが、その数日前、『シネマルーム２９』に掲載する『１１・２５自決の日　三島由紀夫と若者たち』の映画評論について直接お電話を頂いた。事務員が取り次いだ電話口から「映画監督の若松です」という声が流れた時はビックリしたが、私の評論を丹念に読んだ上でのその一部修正の要請にはさらにビックリ。そんな生涯ただ一度の若松監督との「直接対話」は、私にとってはホントにいい思い出だ。

そんな思いを持って本作を観ると、寺島しのぶをオリュウノオバ役に起用したのは『キャタピラー』（１０年）の演技を見れば当然だが（『シネマルーム２５』２１５頁参照）、彼女は原作で描かれたオリュウノオバとは全然年齢が違うため、映画化にあたっては「路地の男たちを見守りながら年を重ねていく若きオリュウノオバ」という風に台本を大幅修正したらしい。しかしそれでも、中上健次の原作『千年の愉楽』が描くのは、壮大なスケールでの性と生。もっと具体的に言えば、紀州南端の町の「路地」に生きる美しき「中本の男」たちの生と死（と言っても、多くの人は何のことかわからないだろうが・・・）だ。

原作では６人だが、本作では中本半蔵（高良健吾）、田口三好（高岡蒼佑）、中本達男（染谷将太）という３人の美しき「中本の男」たちが登場する。美しさ故に多くの女たちが群がってくる、高貴で穢れた血を継いだこの３人の「中本の男」たちそれぞれの生と死は？そんなテーマの原作の映画化に、なぜ若松監督が挑んだの？２０１２年１０月１７日に若松監督が不慮の事故で亡くなったことを考えると、若松監督がそんな原作の映画化に挑んだのは少し早すぎたのでは・・・。

<パンフレット収録の「菅孝行」論文は必読！>

前述のように、被差別部落の出身で「紀州サーガ」と呼ばれる土着的な作品世界をつくり上げた「中上文学」は特殊。多くの人は島崎藤村の『破戒』から「被差別部落」のことを学んだはずだが、私が「被差別部落」を学んだのは学生時代に読んだ白土三平の『カムイ伝』からだ。幕藩体制下の賤民制度が、「士農工商穢多非人」という大きな枠組みになっていたことをダイナミックに描いたこの「長編劇画」は、私にとって最高の愛読書だった。また、それを映画化した『カムイ外伝』（０９年）も面白かった（『シネマルーム２３』１８７頁参照）。

本作を鑑賞するについては、そんな「被差別部落」のことや「高貴で穢れた血」の意味を理解することが不可欠だが、そのためには本作のパンフレットに収録されている、菅孝行氏の『〈路地〉の背景に広がるもの』という「大論文」は必読！この「大論文」を読み通すのは苦難のワザかもしれないが、是非そのチャレンジを！

<三味の音に注目！「花の窟」に注目！>

「万歳」と書けば普通「ばんざい」と読むが、明治の御代を迎えても「路地」ではこれを「バンバイ」と読んでいたらしい。そんなことを歌詞にした悲しい旋律の三味の音と歌声が映画冒頭で響き渡ると共に、本作はこの三味の音と歌声で終わる。それはそれできちんと調べる必要があるが、まさに「中上文学」の真髄である「被差別部落」の「路地」のことがそこで切々と歌われていることはわかるはずだ。しかして、その歌詞の物語るものとは？本作を鑑賞するについては、まずそこに注目！

他方、本作冒頭スクリーン上に映るのは、三重県熊野市有馬町に位置するという「花の窟」。これは、イザナミノミコトとカグツチノミコトを祀ったもので、イザナミは、火の神であるカグツチノミコトを産み落とした時に女陰（ホト）を焼かれて死に、「紀伊国の熊野の有馬」に埋葬されたと『日本書紀』に書かれているらしい。熊野灘に面してそびえ立つこの巨大な岩は、じっと見つめていると、女性器にも、産まれ出る赤ん坊の頭にも見えてくるというが、たしかに・・・。この「花の窟」では年２回、２月と１０月の例大祭では、１７０メートルもの大綱の一方を巨岩の上に、もう一方を境内の松のご神木にかける「御綱掛け神事」が行われているそうだ。本作に再三登場するこの「御綱掛け神事」のシーンは、一体ナニを意味しているの？本作を鑑賞にするについては、それにも注目！

<考えるネタが満載！若松監督の遺作をじっくりと！>

本作のパンフレットには、日曜日の人気番組であるやしきたかじんの『そこまで言って委員会』のゲストとしても時々登場している新右翼「一水会」顧問の鈴木邦男氏の『再生の原点として』という「読みもの」がある。そして、そこでは１９８４年の「全共闘シンポジウム」における作家・中上健次の「立ち位置」が明確に書かれている。そのシンポジウムにおける「たとえば連合赤軍の事件なんかは天誅組の一種だったんではないかと、横にスライドすればそんなふうにみえちゃうんだ」という中上氏の発言は、明治維新後の「差別の歴史」を体験してきた中上氏なればこその問題提起になったらしい。本作に見る中本半蔵、田口三好、中本達男は男の私が見てもたしかに美しいから、こりゃ女が放っておかないのは当たり前。しかし、「モテる」ということが、単純に幸せなことだけではないのは当然。しかも、その男としての美しさが、先祖伝来の高貴で穢れた血によるものであることを認識してしまえば・・・。

このように中上文学は奥が深い。その中でも『千年の愉楽』はオリュウノオバが住んでいる路地の全景が見える家から、オリュウノオバの目で、生まれてから死ぬまでをずっと見てきた３人（原作は６人）の中本の男たちの生と死を描いているだけに、考えるネタが満載！あえて、最新作としてそんな中上文学に挑戦した若松監督の遺作はきわめて難解だが、そこはしっかり勉強しながらじっくりと！

２０１３（平成２５）年3月２３日記